【エッセイ】建長寺の虫塚法要

6月4日は虫の日である．日本昆虫クラブが提唱したとか，この日は虫歯予防デーの方に先取権があるのだとか，そんなことはこの際あまり問題ではない．ちなみに64歳は虫寿で，これは平野幸彦さんが言いだした．虫寿は当人に必ず一度は訪れるから，64歳の誕生日を大切に祝う虫屋は少なくない．もどって，虫の日は毎年のことなので，あまり意識されることはないようだ．たまたまのことであるが，今年（2015年）の6月4日は，2日後の週末に開催される日本甲虫学会の調査観察例会を控え，私は那覇に向かうフライトを予約していたのである．

5月連休明けのある日，新潮社の足立真穂さんからのメールが入った．養老孟司さんが地元鎌倉の建長寺に「虫塚」を創られたので，そのお披露目を兼ねた法要を6月4日の虫の日に執り行いたい．ついては，養老さんの虫屋仲間に通じている伊藤弥寿彦さんと新里に当日の手伝いをお願いできないかと．

かねてより，虫塚の建立を計画されていたことは，養老さんご本人からお聞きしていた．いつになることか話半分で聞き流していたが，まさか今年であるとは思わなかった．メールを見なかったことにしてもよかったが，虫供養を執り行う虫塚法要を欠席した当日に，虫採りに沖縄に向かったとあれば，この身にどんな災いが訪れるかもしれない．ここは覚悟を決めたほうがよいと自分に言い聞かせ，建長寺の山門に出向くことにした．

そもそも虫塚建立の目的とは何か．いま簡単に調べてみると，害虫駆除の供養，虫送りの祈祷，研究・趣味の犠牲となった虫の供養，昆虫の発生地の所在，虫に関する歌碑・句碑とある．目的はさまざまで慰霊だけではないようだ．有名な寛永寺（東京上野）の虫塚は，伊勢長島藩主の増山雪斎により，写生に用いた虫の霊を供養するために，文政4年（1821）に建てられたものであるという．本隆寺（福井県敦賀市）の善徳虫塚は，天保7年（1839）に駆除した稲の害虫の霊を供養する目的で建てられた．新しいものでは，つくば市の農業環境技術研究所にも虫塚（1985年建立）があり，そのほか全国各地に薄くだが広く所在するらしい．

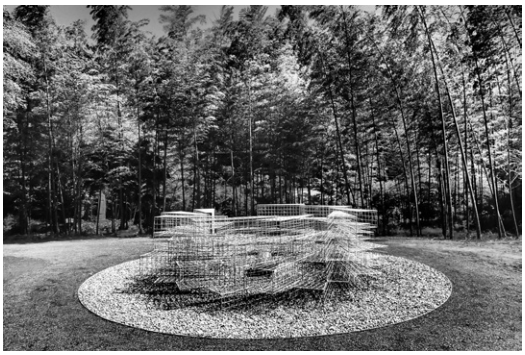
建長寺の虫塚は，虫屋が建立を企てたという点では農環研と似たような趣旨にあるが，一趣味人が手掛けたものとしては唯一無二であろう．もしや虫採りの煩悩を鎮める霊験もあるのではないかと思ったが，ご当人の虫屋現役ぶりを見る限り，その方面にはあまり期待しないほうがよさそうである．

虫塚は，建長寺の参道からそれ，緩やかな坂道を登り詰めた一画に鎮座している．玉石を敷いた円陣の中心にオサゾウムシのモニュメント．その周りは虫カゴを模したステンレス製の金網がらせん状に囲んでいる．ステンレスには土が吹き付けられ，積年の風雨にさらされた後には，緑濃く苔生すように工夫がされている．設計は日本を代表する建築家の隈研吾さん．養老さんと隈さんは，中学・高校・大学を通した先輩後輩の間柄で，そうでなくても親しいご関係にあるらしい．

ここは三浦半島であるから，虫塚の周りはタブノキやアラカシなどの照葉樹林に囲まれている．向かって左手には，まだ若いモウソウチクの林が初夏の風を受け揺れていた．後背地の斜面では，イワタバコの薄紫色の花が今まさに盛りであった．

当日は朝11時に受付が始まり，昼前までの小1時間ほどで法要の式典が執り行われた．その後は，寺の講堂に参集して，折詰の寿司とけんちん汁がふるまわれ，1時過ぎには流れ解散となった．参加者は養老さんと親しい友人知人で50名あまりほど．イラストレータの南伸坊さんや武術研究家の甲野善紀さんらもいらしていた．それにマスコミ関係者が10名あまり．虫屋は露木繁雄さんや小檜山賢二さんらを拝顔したが，それも10名くらいであった．

建長寺には大学1年の冬にタテジマカミキリを採りに行ったことがある．カクレミノの大木に登っ



建長寺の虫塚全形．

虫塚本体のオサゾムシ．（写真左右とも伊藤弥寿彦撮影）

てだいぶ探したが，私は食害された枝を見つけただけで，そのときは同行の川田一之さんが成虫を一つ採った．いま思いだしたが，関東地方で昔は大珍品だったカノコサビカミキリは，養老さんが同じ鎌倉の妙本寺で 1963 年に叩き網で落としてきたのがきっかけで，その後この建長寺のカラスウリにもたくさんいることがわかった．露木さんが「カミキリ学のすすめ」でそのように書いている．

6 月 4 日当日は朝から晴れ渡り気温も高かった．法要に向かう道すがら，アジサイの上を低く飛ぶ赤い甲虫が目に留まり，私は並んで歩く樹應 (きお) 君に「ベニボタルだね」とことなげに告げた．彼は伊藤弥寿彦さんのご子息である．樹應君は 2・3 歩足早にしてその虫を掴み取り，私の前にそっと差しだしてくれた．その瞬間，ただの赤い甲虫はベニバハナカミキリに化けたのである．何がその後に起きたのかは，ご想像の通りである．

（新里達也）

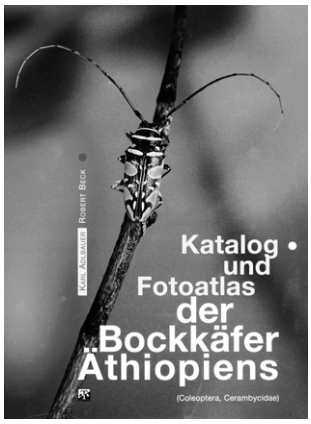
書評

Adlbauer, K., 2014. Katalog und Fotoatlas der Bockkäfer Äthiopiens.（エチオピア産カミキリムシのカタログ図鑑）. 312 pp. Taita Publisher, Czech Republic.

極東の島国にいる私たちは，異国の自然や文化に対する興味に希薄といえる．冒頭より本題と無縁に思える話を始めたのも，虫に対する興味もまったく同じであるからだ．いうなれば，日本の昆虫に抱く強い愛着と裏腹に海外モノに向けた冷たい視線．研究であれ趣味の収集であれ，なぜか私たちはそういった反応をすることが多い．

ここで紹介する新刊のタイトルを見たとたんに，「何だ，アフリカのカミキリか」というつぶやきが聞こえてくるようだ．たしかにアフリカは遠い．虫の顔つきもだいぶ違うことだろう．しかしそんなことばかり言っているから，いつまでも世界が拡がらない．本書は，アフリカ北東部・エチオピアの地域ファウナを扱った図鑑であるものの，アフリカのカミキリムシを知る入門書としての内容と魅力を十二分に兼ね備えている．

著者のカール・アドルバウァーは，アフリカ大陸を守備範囲とするカミキリムシの数少ないスペシャリストである．いや随一といってよい．彼に比肩するような現役研究者はほかに見当たらないからである．その高名は名著「Adlbauer, K., 2001. Katalog und Fotoatlas der Bockkäfer Namibias（ナンビア産カミキリムシのカタログ図鑑），」で広く知られるところであるが，彼が毎年出版する新タクサの記載論文の数もまた膨大なものである．



本書はナミビアを扱った前作の同シリーズに位置づけられる．すなわち，エチオピアから記録されるほぼ全種のカミキリムシ 561 種の標本写真が，大きく贅沢にレイアウトされ，絵合わせによる種名同定が可能である．ただし，体長以外に種の特徴の情報はない．巻末にはエチオピア産のカミキリムシのリストがまとめられている．

さらに，環境写真が多数掲載されているのは，私たち異境の人間にとって興味をそそられる．熱帯雨林からサバンナの疎林に至るまで，アフリカの甲虫の生息環境の多様さを一望できる．私も数年前に一度だけ，南アフリカ東海岸でカミキリ採集を試みたことがあるが，掲載写真から当時の記憶が鮮やかに蘇り，胸が高鳴る思いがしたものである．

エチオピアのカミキリムシ相は，アジアのそれとまったく無縁かといえば，決してそのようなことはない．種レベルではさすがに皆無だが，属レベルでアジアとの共通するものは 23 を数えることができる．とくに，私たちに馴染み深い日本との共通属は，モモブトコバネカミキリ属 *Merionoeda*，イボタサビカミキリ属 *Sophronica*，アラゲケシカミキリ属 *Exocentrus* などの属がある．アジアにはわずか 2 種が知られるだけのイボタサビカミキリ属は，エチオピアから 20 種が記録されていて，種分化の中心はむしろアフリカ北部にあることを伺い知ることができる．

本書は昆虫文献六本脚（kawamo.co.jp/roppon-ashi）で 18,500 円で購入できる．在庫少数と聞いているので，興味ある方は早めに購入されることを勧める．

（新里達也）